いては、骨階層と頭品階層を併せた八階層からなる秩序構造が六世紀に成立したとする通説に對して、九世紀になって眞骨以下の七階層が成立したという説もあって、その史的展開過程はつまびらかではない。しかし、一九七八年に韓國の國寶に指定された新羅華嚴經寫經跋文（七五五年）に「六頭品」身分の者が檢出され、九世紀成立説は存在しえなくなった。

ただし六世紀にさかのぼって多階層からなる骨品制の成立を裏づける明證は全くない。解明の糸口は、七世紀後半まで新羅王京人の身分標識として內外に誇示された六部（「地緣集團」）と骨品制とがいかなる連關を有していたかの檢討にある。これを手がかりに、その骨品制度成立時期が七世紀後半にあったことを提唱してみたい。

地方の商會と在來產業の發展
——河北省高陽縣一九〇六～一九三七年——

リンダ・グローブ

我々の、二〇世紀の中國における商會の役割に關する知識や見解のほとんどは、中國の主要都市の商會の殘した記錄をもとにしたものである。最近の商會に關する研究は、商會の政治的な役割を檢證するものや、商會の活動が實際に清末民國に生まれた市民社會で始まったのかということを問うものが多い。これらの論文では、主要都市の商會を據點としていた「紳商」が頻繁に研究對象として扱われている。しかし、この論文ではこれらの研究から視點を變え、ある小さい町の商會の經濟活動を檢證する。

中國における最初の商會は一九〇二年に上海で設立された。それに續いて一九〇三年に天津と福州で、一九〇四年には南京、厦門、重慶、そして溫州でも商會が設立された。一九一二年までには全國に七九四の商工會議所があり、その內の五一の總合商會は大きな都市に、そして七〇〇以上の支部は縣や地方の比較的小さな都市におかれた。高陽の商會もこれら多くの小さな商會の一つである。

高陽商會は一九〇六年に、商會の設立に關する規定に從って設立されたとはいえ、それの實際の活動は日本の產地における同業組合に近いものであった。この論文は高陽商會の樣々な活動——產業の發達の促進、稅金の優遇の獲得、商業に關する知識の供給、そしてそれの役員の中國全國商會聯合會における活躍による高陽の知名度の向上——を通してこの商會が高陽の纖維產業にどのような貢獻をしたかを明らかにするものである。

京都客寓時代の羅振玉と內藤湖南の交友について

杉村邦彥

羅振玉（一八六六—一九四〇）は、清末民初を代表する碩學の一人である。特に著述の宏富な點では、『羅雪堂先生全集』全一四〇册によっても明らかなように、古今に冠絕すると言っても過

言ではない。彼の學問研究を類型的にとらえると、清朝になって著しい發達を遂げた金石學、訓詁文字學、校勘輯佚學、版本目錄學など、總じて樸學の範疇に入れることができる。彼の厖大な著述をその手法上から大觀すると、對象のいかんを問わず資料の集錄と歷史的な考證の二類に大別することができ、このうち集錄が大半を占めていることに氣づく。彼はなぜ資料の集錄にかくまで精魂を傾けたのか、そこには切實な治學の動機があったと考えられる。

羅振玉が活躍した清末民初は、甲骨、彝器、漢晉の木簡、敦煌遺書、新出の石刻、舊鈔古槧などおびただしい文物が出土ないし出現した時代であり、彼はそれらを過眼できる喜びを〝文字之福〟と稱した。しかし、一方では革命軍の蜂起、清朝の滅亡、先進列強の侵略という未曾有の激動の時代でもあったから、それら珍貴な文物は巷閭に溢れ、海外へ大量に流出した。これは彼にとって〝文字之厄〟とも言うべき深刻な事態であった。彼は〝文字之福〟と〝文字之厄〟が同時に押し寄せるという未曾有の時代に際會し、幻のごとく眼前に現われ、幻のごとく眼前から消え去りゆくそれら文物・資料を繫ぎとめ集錄することに精魂を傾けたのである。

集錄への情熱は、宣統三年（一九一一）から民國八年（一九一九）までの京都客寓時代に、內藤湖南の協力を得て、ますます拍車が掛けられることになった。それは一樸學者がたどった激しくも孤獨な營みであった。今回の發表では、彼の人間像、生活、交友、書法なども視野に入れつつ私見を述べたい。